

種山石工の足跡

腐らない橋 大水が出ても流されない橋がほしい—そんな人々の願いに応え、石の橋を造りたいと思つ男がいた。彼の名は藤原林七。通潤橋を、霊台橋を、多くの橋を造り、明治政府に招かれ二重橋をも建造した種山石工。その祖と言われる。長崎奉行所勤めだった林七は、禁を犯し、門外不出の石橋の工法をオランダ人から学びとつた。逃亡中、不知火干拓に使用されていた阿蘇凝灰岩を見た彼は、この石が、橋の理想的な材料だと知つた。彼は石を豊富に産出する種山村(八代郡東陽村)に移り住み、今も残る鍛冶屋橋を造つた。彼の情熱と、阿蘇凝灰岩が出合った時、たぐいまれな石橋文化が生まれた。



中村精彦さん 99さい元氣!!



雄亀滝橋



通潤橋(鞘石垣)



金内橋



大窪橋



下鶴橋(欄干)



二俣橋



霊台橋

テクノロジー
技術と自然がともに生きる
大切な知恵を今に伝える
——”石橋の時代”

D A T A

■東陽村石匠館(八代郡東陽村)
7月24日オープン。東陽村に点在する22の石橋をはじめ、九州の代表的石橋のパネル展示、橋の構造などを理解する体験コーナーと、だれもが楽しく石橋を学べる。石匠館と一緒に建てた中国の石工からの贈物、大きな狛犬が迎えてくれる。

■二俣橋(下益城郡中央町)
1822年、石工嘉八。直角に架かるよく似た双子橋—第一二俣橋、第二二俣橋からなる。なお、釈迦院川と津留川の合流点に架かる5つの橋(二俣橋、年弥橋、コンクリート橋、国道橋)を「二俣五橋」という。

■大窪橋(下益城郡砥用町)
1849年完成。石工丈八。田畑の中に入り、橋の真ん中が盛り上がった形が独特の風情。この橋のおかげで人々は、川向こうの日当たりの良い水田を耕すようになったとか。

■霊台橋(下益城郡砥用町)
1847年完成。石工卯助。宇市、丈八。アーチのスパンは28.36メートル。単アーチ橋では日本で最大。建造時には上流にダムがなく川の水量も多く難工事だった。現在は橋を保存するため、すぐ横に新橋が建設されているが、長い間国道218号の一部として活躍。昭和42年国の重要文化財指定。

■雄亀滝橋(下益城郡砥用町)
1817年、石工岩永三郎。日本で最も古とも言われる水路橋。橋の竣工式を、後に通潤橋を建設した惣庄屋、布田保之助(この時17歳)が見て感激。ヒントにしたという。

■通潤橋(上益城郡矢部町)
緑川の支流轟川に1854年架橋。川の南西の白糸地区を灌漑するためのサイフォン式水路橋。建造の際、肥後藩主細川斉護は、秘法だった熊本城石垣や漆喰の工法を特に許して学ばせたという。放水の勇壮さは有名。惣庄屋・布田保之助、石工宇市、丈八の入魂の作。昭和35年国の重要文化財指定。

■旧御船川目鑑橋(上益城郡御船町)
1848年、石工宇市、丈八。御船川に架かる美しい2連のアーチ橋だったが、昭和63年の水害で流失。現在はコンクリートの「思い出橋」になっている。そばに目鑑橋の模型などが飾られ、在りし日のがばれる。



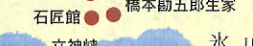
東陽村石匠館
勸五郎が石工の
トレーニングに使
いたれるかな。
120キロ!!
も、モロい...



勸五郎の東京みやげ、世界地図ほか



鍛冶屋中橋



石匠館

橋本勸五郎生家

立神峠



東陽村石匠館
アーチ工法の体験



雄亀滝橋

▼種山石工の末裔が
偉大な歴史を伝える村
生妻と石工の里、八代郡東陽村の「東陽村石匠館」。石橋の構造から現存する橋まで、石橋のことがよく分かる。「石工は給料が良かったと言いますが、そんなことはありません。大きな工事は命掛けだし、厳しかんてです」石工の歴史などを情熱的に語る館長の古田清秀さん。祖先はやはり石工だった。石匠館のすぐ前には橋本勸五郎(通潤橋を架けた)の生家を訪ねた。美しく並んだ庭の石垣が、熊本城の武者返し風に反っているのは、さすが。勸五郎の首孫に当たる橋本成成さんは、「子どもの時は何も知らず、勸五郎が通潤橋を造るときに使った木の模型で遊んだりしました。穏やかな口調でぼつぼつと話す。石橋を造る旅の始まりだ。

▼ひっそりと、脈々と、
最古の水路橋は「現役」
東陽村から砥用町へ。国道二二八号線を石野地区へ入って四キロ。ひっそりと、日本最古とも言われる水路橋・雄亀滝橋は生き続けていた。澄んだ水の流れる水路の脇の畦道を、二百メートルほど。目の下は深い谷。この谷には、当惑谷という名が残る。せつかく田を切り開いても、この谷にぶつかると用水路を通せず、土地の人たちを困らせた。水を通す橋がどうしても必要だった。今も七十ヘクタールの水田を潤す。今から七十年前以上も前、初めてこの橋を灌漑用水が通った時の村人の喚声が、耳に響くようだ。

この橋を造つたのは、岩永三郎。彼は後に薩摩藩に招かれ、甲突五橋を架けた。この時薩摩に同行したのが、林七の孫に当たる卯助、宇市、丈八ら。

▼「国家機密も手にする」
先進テクノロジー
橋を造るために石工は、地勢をはじめ、藩外に漏れては困る機密情報も手にすることになる。生命が危険にさらされることもあった。三五郎は卯助らに「私は薩摩で殺されるかもしれない。おまえたっけは、先に熊本に帰れ」。石橋工事は、先進のテクノロジーでもあり、国家機密にふれる一大事業でもあった。

熊本へ帰った卯助らは、師と仰ぐ三五郎なしで、大仕事に取り組む。霊台橋の建設である。莫大な費用を掛けた工事は、失敗すれば切腹覚悟。家の断絶を恐れ、また、命をかけた工事に思ふところもあつたのか、霊台橋の完成後、長男の卯助は髪を剃り兄弟の無事を祈り続けた。現在、橋の周辺は公園として整備され、散策コースもある。石工たちの苦勞も知らぬげに、近くの河原は、水遊びの家族連れでにぎわう。

▼西南戦争も、平和な屋下がりも、
橋は見て
卯助の弟、宇市と丈八は、霊台橋という大事業を成し遂げた後も、多くの橋を手掛ける。その一つ、矢部町の金内川に架かる金内橋。草むらに隠れているが、よく見ると大小二連のユニークな眼鏡橋。小さい方は用水路をまたいでいる。「私のばあさんが、よう話

しよりましたが、十年の戦争(西南戦争)の時、薩軍も官軍も、この橋の上で休んでいたそうです。うちのばあさんは、気丈なもので、薩軍を家に泊めたりしてました。この地区で村長も務めた中村精彦さん、元氣な九十九歳。橋の近くに住んでいる。人も橋も、長生きた。百十七年前、戦いに疲れはてた兵士を慰ませた橋の上で、中学生の少女たちが笑いさざめき、自転車を押す。

▼自然に逆らわない、自然によりそつ、
石工たちの知恵
この橋の完成から四年後、通潤橋が完成。棟梁の丈八は橋本勸五郎を名乗り、明治六年東京へ招かれる。二重橋や日本橋を架け、破格の待遇を受けた勸五郎だが、妻の重病の知らせに、上

この長寿の秘密は何だろう。「流されない橋を造るには、水量を測り、水の方向を知り、その流れに逆らわない橋を造らんといいかん。種山の石工たちは、その計算力が優れていたんです」(古田館長)。自然を力であつていふのでなく、自然に逆らわない技術、それはそのまま、自然と共生する知恵でもある。歴史的遺産「石橋を訪ねる旅は、未来へのヒントに富んだ旅でもあった。

司の引き止めを振り切つて翌年帰郷。妻の死の悲しみの中、それを忘れるかのように仕事に没頭する勸五郎。息子の弥熊に棟梁を譲り、二人で造つたのが、御船川の下鶴橋。八勢川と御船川の合流点に架かる。欄干の親柱に、「とつくり」「盃」が掘りぬかれ、ユーモラスな遊び心を感じさせる。勸五郎晩年の橋は、熊本市、御船町と矢部町を結ぶ大切なルートで、百年以上生きてきた。